森敦と月山

森敦先生文学記念碑並びに記念文集刊行実行委員会

234806

日文 701693549

森敦と月山

森敦先生文学記念碑並びに記念文集刊行実行委員会

大連外国语学院图书馆
藏书

日本財団支援
笹川良一記念文庫
財団法人日本科学協会

森敦と月山

昭和五十六年十一月三日　初刷発行

非売品

発行　森敦先生文学記念碑建立並びに
記念文集刊行実行委員会
実行委員長　上野源治
〒九九七―〇四　山形県朝日村大字下名川字落合一番地
朝日村役場内
電話（〇二三五五）(3)―二一一一番(代)

編集・製作／株式会社　東北出版企画
〒九九七　鶴岡市若葉町十五番地五号
電話（〇二三五）(23)―九一二二番(代)

製版／サタケ製版　印刷／北星印刷　製本／中山製本所

© 1981 PRINTED IN JAPAN

はじめに

月山

すべての吹きの
寄するところ
これ月山なり

森敦先生の筆による碑文を刻した文学記念碑は注連寺境内に悠然と座している。
その姿は、見る人によって背後に控える月山にも思われる。
月山へと寄せる吹きに、吹き寄せられるがごとく、注連寺に森先生は辿りついた。
月山により生を受け、月山は小説「月山」により文学記念碑になり生を受けた。

文学記念碑は、森文学の心を語るであろうし、月山の本念をも語るように思われる。いわば月山と作家森敦の接点のように思われるのです。

そして、それは未来永劫変わることのないものと確信しております。

右に出羽丘陵、左に月山、中をゆったりと流れる赤川、その赤川をやさしく包むように広がる庄内平野……。

月山は標高一九八〇メートル、その山容は半月を臥せたようになだらかである。

山形県は月山を挟み庄内と内陸に分かれ、風土も言葉も違う。そして月山の内陸に臨む姿は、どこまでもまどかでありやさしく女性的である。

反面、庄内に臨む姿はその山腹の落とされん限りを落し、冬の日本海からの強い季節風をまともに受けて立つ姿となり、深い幾本もの傷をもち、男性的である。

その傷ともいうべき渓谷を流れ出る水が梵字川となり、赤川となって庄内百万石の美田をうるおし秋の収穫を与えてきました。

いわば赤川は庄内の母なる川であり、赤川に注ぐ支流は月山から生まれているのです。

山形県朝日村七五三掛は庄内平野の一角ともいえず、月山のふもとというには遠い所に位置しています。

ここに昭和二十六年の夏の終りに、ひとりの男が流れてきました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この男が後に小説「月山」を書き芥川賞を受賞するとは誰が思ったであろうか。

昭和四十九年、作家森敦先生は小説「月山」で第七〇回芥川賞を受賞されました。「月山」は昭和二十六年夏から翌春にかけて、七五三掛にある大きな寺、注連寺に滞在し、そこの人々とかかわり、自然とかかわりあいながら厳しい冬の日々を過ごされた経験をもとに、先生独自の論理と清冽な表現で書かれた小説であります。

それは、あたかも読んでいるのは確かに自分なのですが、何か吟遊詩人の朗読を聞いている気持ちになり、言葉の響きが心地よく感じられるのです。

私達は、先生が芥川賞を受賞されましたことを記念し、先生が当地山形県朝日村注連寺に滞在してから三〇年になりますのを機に森敦文学記念碑建立と記念文集の刊行を思い立ちました。そして先生ゆかりの方々、各界の方々から絶大なるご賛同をいただきまして、文学記念碑においては八月二十八日注連寺に森先生はじめ多くの皆様のご臨席を仰ぎ、盛大なうちにも厳粛に除幕式を行うことができました。

そして、記念文集刊行においても、先生ゆかりの方々、庄内平野を転々としていたころにご縁のあった方々など、多くの皆様のこころよいご賛同のもとに刊行し、記念事業の完遂をみることのできますことは、この上ない喜びとするところであり、この地に住む者達にとって最大の誇りとするところであります。

月山はいま、夏も終り、秋も通り過ぎようとしています。
そして、あの生と名のつくすべてのものを拒否する白い世界がすぐそこまで来ています。
その世界は三〇年前と同じ世界なのだろうか。
もし、そうだとしたら　またひとりの男が吹きに寄せられて来るかも知れません。
今度は文学記念碑という〝月山〟にも寄せられて――。

森敦先生文学記念碑建立並びに記念文集刊行実行委員会
実行委員長　上　野　源　治

目次

はじめに　23

1

森敦君とぼく　北川冬彦　34
『月山』をめぐって　小島信夫　38
森さんのこと　三好徹　48
定期便　勝目梓　72
鷹の目　日野啓三　78
森敦さんとの出会い　真鍋呉夫　82
日中戦争前夜の文学活動—『麺麭』を中心に　千葉宣一　88
碑は語る　井上謙　96
森敦さんのこと　糸川英夫　102

2

小説『月山』から映画「月山」へ　村野鐵太郎　110

昇天式　新井　満　114
『月山』の装幀　司　修　124
月を指す指のごとく　芝　修一　130
『月山』の舞踊 ―私自身の解脱への道しるべ　坂本晴江　134
心の故郷　高山由紀子　142
夢見る旋律　今岡頌子　146
森敦先生の文学記念碑除幕式に参加して　高野悦子　150
私の森敦観について　金田成就　154
〝人生の筆〟を期待　田丸秀治　158
『月山』あれこれ　あずさ欣平　164

3

小説『月山』にみる森敦の山岳観　戸川安章　170
『月山』の世界　松坂俊夫　176
私の中に　安達清　180
激動の時代の永遠のモニュメントとしての森敦先生の文学碑をたたえる　秋山太一郎　184

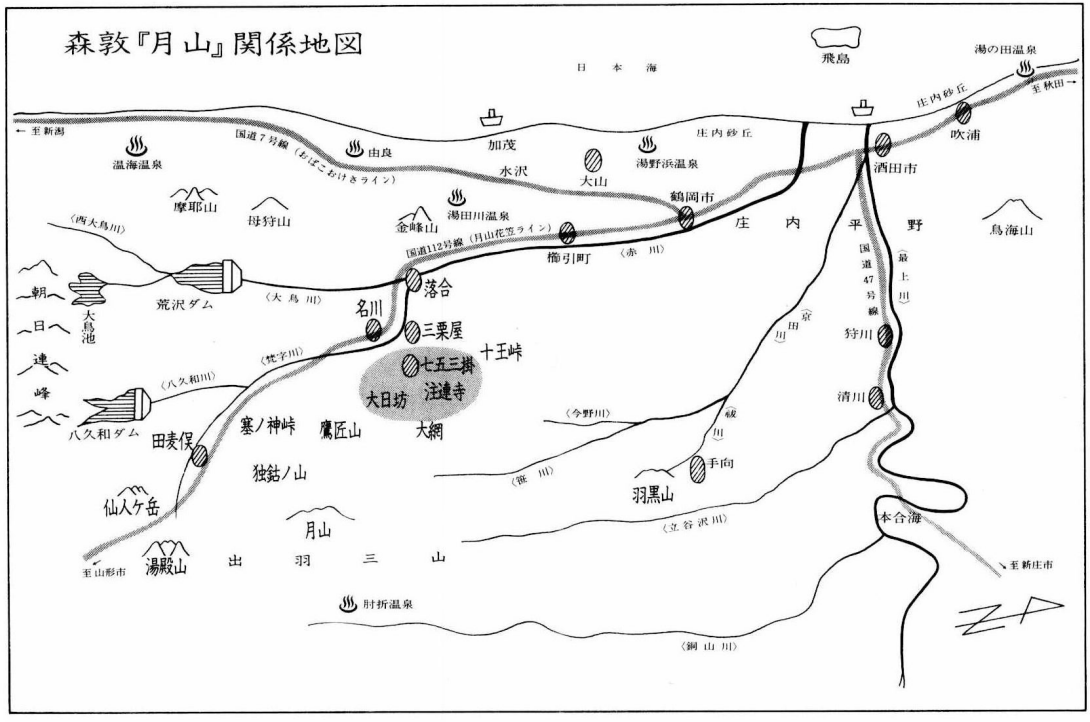
生と死　林　正近　190
左跳ね腰　佐藤　憲一　200
無私とロマンの心　渡部　宏　208
月山を描いている者として　今井繁三郎　212
日本人の魂に問う「月山」　丸山　光夫　216
月山随想三題　今野与喜雄　220
月山慕情　山崎　誠助　230
天の夢　富塚　喜吉　234
和紙の蚊帳　伊藤　永恒　238
注連寺に居る頃の森敦先生と私　伊藤　明栄　248
大網地区への期待―「農に生きる」運動を考える　鴻池　雅夫　256
「月山は神様です」―民衆の来た道、母山回帰　田村　茂広　260
聞き書　あの頃の森さん　269
森敦略年譜　井上　謙　八木　泉　289

あとがき　301
『月山』関係地図　32
口絵写真　森敦のアルバム、他　7
本文写真　朝日村大網を取材中の森敦、他　55
73
107
125
159
193
227
245

装幀／司　修
本文挿絵／本間　実
口絵・本文写真／黒井卓也・北川　忍

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

森敦と月山


森敦『月山』関係地図
日本海
飛島
湯の田温泉
至秋田→
庄内砂丘
吹浦
酒田市
庄内平野
鳥海山
←至新潟
温海温泉
国道7号線（おばこおけさライン）
由良
加茂
水沢
湯野浜温泉
大山
鶴岡市
摩耶山
母狩山
湯田川温泉
金峰山
〈西大鳥川〉
国道112号線（月山花笠ライン）
櫛引町
〈赤川〉
朝日連峰
大鳥池
荒沢ダム
〈大鳥川〉
落合
名川
三栗屋
七五三掛
十王峠
大日坊
注連寺
〈荒字川〉
〈八久和川〉
八久和ダム
田麦俣
塞ノ神峠
鷹匠山
大網
独鈷ノ山
仙人ケ岳
月山
湯殿山
出羽三山
至山形市
肘折温泉
〈銅山川〉
〈今野川〉
〈笹川〉
手向
羽黒山
〈立谷沢川〉
本合海
↘至新庄市
国道47号線
〈最上川〉
〈京田川〉
狩川
清川
〈板川〉

/

森敦君とぼく

北川冬彦

森敦君とぼくとの交友は実に久しいが、いったい、いつからそれが始まったのだろうか。ぼくの第一エッセエ集『詩人の行方』の「跋」を森敦君に書いてもらっているが、この本の出版は昭和十一年だから、これ以前であることは、たしかである。ああそうだ、思い出した。森敦君にはじめて会ったのは、井ノ頭線の池の上駅近くの、横光利一氏の書斎で氏に紹介されたんだ。そのときかれは黙って笑みをたたえていたが、喋り出したら止め度がなかった印象が残っている。昭和のはじめ頃のことだったのだ。その頃、かれの家は横光氏の家に近く、ぼくは下北沢に下宿していて、横光氏のところへしばしば出かけたが、横光氏の書斎で森君に遭うことが多かった。気むずかし屋で人づき会いのわるいぼくだのに、森敦君とは初対面から、妙に気が合った。かれは二十歳そこそこの青年には似ず、博覧強

記で、かれが喋るごとにぼくは感心せずにはいられなかった。かれの『文壇意外史』では、ぼくのことを「天衣無縫、天を向いて笑う、屈託もなく笑う」と書いているが、それは森君自身のことであると云っていい。いや、どちらものこと、と云った方がただしいのかも知れない。それはともかく、ぼくはかれのお喋りに多くのことをおしえられた。ぼくは小・中学時代を文化的不毛の満洲の地ですごしたので、教養というものを身につける機会が少く、ぼくが愛読することになった与謝野晶子の口語訳『源氏物語』や田中貢太郎訳の『聊斎志異』などは、かれによって知らされたのだった。

かれの小説に「酩酊船」というのがある。これは、はじめて会ったとき、すでに横光氏の推薦で毎日新聞に連載済みだったが、ぼくは新聞小説は読まないクセで読んでいなかった。だが、『月山』が芥川賞をとってから、「サンデー毎日」が『酩酊船』を復刻した。ところがかれは不服だった。というのは、毎日新聞がこの小説を連載したとき、書き出しの何枚かが、新聞小説としてはむずかし過ぎるという理由で、削られた。かれとしては、この部分が重要なのだというのだ。どうやらその部分は幻と化したようで、かれはこの小説に觸れたがらないが、私は復刻の『酩酊船』を読んで、『酩酊船』における森敦君の青春のリリックは、会話の端々に見出される近代的思考が裏づけとなっていて、川端康成の『伊豆の踊り子』を抜いた作だとぼくは思った。

ぼくはぼくの第一エッセエ集『詩人の行方』を大津出身のゆかりから、大津の第一芸文

社という出版屋が処女出版としたいという申出を納れることにした。そのとき、「跋」文を森敦君に依頼したことはさきに書いたが、かれは、「ぼくは幼少のころから、三字経、蒙求、小学校にはいってからは四書五経の素読に通わせられた」（『文壇意外史』）という経歴だけあって名文をものした。

それを省略しながら引用して見ると、

「完璧にむかい粒粒の苦節が却って氏を多作することから遠ざけてはゐたが、醱酵を待ってなされる氏の芸術はその尺蠖の属するにも似た忍耐に打てば鏘鏘金玉の響あり。隻句片言も実践ならざるなき。その逞しき精神の相剋圖は一読ただちにわれ等が肺腑を刺貫かずにはおかぬのだ。（中略）「凝視がやがて愛であるという氏はそのおなじ変轉に対する殆ど肉体的な眞摯さに往往氏の論及考察すべき問題を多岐にわたらしめたが、氏に亡羊の寓言をもって評するのは的ってゐない。混迷の憂ひにあるとき氏は蹶然敢ておのが身を深淵に挺するのだ。なんと其處は深いことだ。孫語の所謂挺身の危機を欲するの心が氏にあらゆる意味での限界を好ませながら、抑制がつねに氏を間髪に救っているのである。（中略）われ等は氏の世代の行方をも知り得るのである。

事実、氏の豫言はつねにあまりに早やすぎた。この上にも氏は豫言の早やすぎた先覚者の悲劇を嘗めねばならぬであらうか。高樓より衆生に千本の團扇をまくといふ唐招寺会式にさき立った一日、氏と新緑の山上に相会した。樹間雲去り雲來るのである。（中略）寧楽

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com